

尾形光琳の江戸在住と画風転換について

——尾形光琳筆「白梅図屏風」(フリーア美術館所蔵)を中心に——

江村知子(東京文化財研究所)

尾形光琳(1658~1716)の比較的初期の制作とされる「燕子花図屏風」(根津美術館)と、晩年の制作とされる「紅白梅図屏風」(MOA美術館)はともに金地濃彩による花を主題とする絵画とすることができるが、この二作品には、対象物をとらえる線描、彩色技法、絵画空間の構成などに、大きな差違が認められる。これらの制作時期の間に、光琳は数回にわたり京都から江戸へ下向し、作品制作を行っている。光琳は江戸で雪舟や狩野派など、漢画系の絵画を見て学び、自らの画風を発展させたと考えられているが、具体的な作品制作背景や江戸における光琳の詳細な事蹟は不明で、検討の余地を残している。

そこで本発表では、光琳の江戸在住の頃の制作と考えられる、「道崇」印を有する作品を中心に画風転換について検討を行うこととする。まず、これまで本格的な調査研究対象とされてこなかった、フリーア美術館所蔵、尾形光琳筆「白梅図屏風」について取り上げ、作品の詳細を報告し、光琳の画業全体の中での位置づけを行いたい。「白梅図屏風」(F1905.19、紙本着色、六曲一隻、以下本作品)は画面の左側に重心を置いた構図で、白梅の大きな幹が描かれ、いったん画面上方に出て、再び垂下し、屈曲した枝とそこに綻ぶ梅の花が表される。画面下方には土坡と流水が描かれ、画面左端中央には「法橋光琳」の落款と「道崇」朱文円印が捺されている。本作品には、絵具の剥落、本紙表面が損傷を受けている箇所も散見され、制作当初の状態からは少なからず変化していると見られるが、発表者は本作品を光琳の江戸在住期における本格的な絵画制作の道程とその画風転換を示す一作例と考える。梅の幹を、しなやかに湾曲、あるいは鋭角に屈曲させながら形づくることや、梅の花を正面向き、横向き、蕾の3種類の形で表すことなどは、光琳の他作例における梅の造形の特徴とも共通する。また本作品は、墨梅によって六曲屏風の画面を構成する試みとも見なすことができる。この試みは光琳の画業において必ずしも成功したとは言えないが、その後の作品制作において重要な意義を持つとも考えられる。梅は光琳にとって縁の深い主題で、「紅白梅図屏風」、「竹梅図屏風」などの絵画作品のほか、小西家旧蔵光琳関係資料の中の蒔絵の図案などにも見られ、ありとあらゆる画面に梅を描いていると言っても過言ではない。本作品と光琳の梅を表した作例、あるいは「道崇」印を有する他作例とも比較しながら、光琳の画風転換とその意義について考えてみたい。